

関西 2001年

「100兆円経済圏」
への挑戦

日本経済新聞社〔編〕



関西 2001年

「100兆円経済圏」
への挑戦

日本経済新聞社〔編〕

日本経済新聞社

関西2001年

1993年11月9日 1版1刷

1993年12月8日 2刷

編者 日本経済新聞社

© Nihon Keizai Shimbun, Inc. 1993

発行者 田村祥藏

発行所 日本経済新聞社

〒100-66 東京都千代田区大手町1-9-5

電話 (03) 3270-0251 振替東京 3-555

ISBN4-532-14252-0 印刷・広研印刷
製本・トキワ製本

本書の無断複写複製(コピー)は、特定の場合を除き、著作者・出版社の権利侵害になります。

Printed in Japan

まえがき

「関西は面白い」とよく言われる。ユーモア、機知機略、先見性・創造性に富み、ビジネスから文化・ファッションまで、その特性は幅広い分野で発揮されている。一般には「東京発」と思われているものでさえ、発生の地をたどれば実は関西に行き着く事例が少なくない。日常生活面でも、超過密の東京・首都圏に比べれば、ゆとりがある。東京から一步距離を置き、醒めた発想が出来ることも大きな魅力だ。

その関西（近畿圏）も産業構造の転換の遅れや東京一極集中のありで、ここ二、三十年、ほぼ一貫して地盤沈下してきた。バブル経済崩壊のツケも重くのしかかっている。

しかし、永い歴史と独自の文化を誇り、産業・経済をリードしてきた関西の底力と可能性は、今なお健在である。その経済力（GRP＝域内総生産）はカナダ一国に匹敵、英国に迫る。二十一世紀に向けたインフラ（経済社会基盤）整備計画も目白押しで、関西産業活性化センターの調べでは、約四十兆円規模のプロジェクトが列を作っている。

日本初の二十四時間利用可能な関西国際空港がいよいよ一九九四年九月に開港するのをはじめ、東の筑波研究学園都市とは全く趣を異にする関西文化学術研究都市も同年秋季に街開きし、神戸と淡路島を結ぶ世界最大の吊り橋、明石海峡大橋も九八年春に完成・開通する予定だ。四国を含め

た大阪湾岸の広域・総合開発を目指す大阪湾ベイエリア開発構想も動き出した。二十一世紀初めにかけて関西経済はダイナミックな成長が期待されている。

ヒト、モノ、カネ、情報の東京集中による歪みをどこまで是正できるか。九〇年代の関西経済の歩みは、単なる地域経済の次元を超えた日本全体にかかわる問題をはらんでいる。

二十一世紀まで、あと七年——。本書は関西を舞台に、どのような近未来像が描かれ、人々がどう取り組んでいるか、最新の動きを追うとともに、二〇〇一年の関西像をシミュレートしてみた。

その内容は、九二年九月から九三年七月まで日本経済新聞朝刊の近畿経済面で連載した長期企画をベースに、一部加筆修正したものである。なお、登場する人物の肩書き・年齢は原則として掲載当時のままとした。大阪本社編集局と近畿の支社・支局の記者たちが本書に込めた問題意識が、あすの関西、そして日本に前進のエネルギーとなれば幸いである。

一九九三年十一月

日本経済新聞大阪本社編集局長

鞍田 暹

目次

1章 巨大プロジェクトを超えて

- 京滋奈、弾む知的都市圏 8／ハイテク施設に「頭脳」結集 12／おはよう四国通勤族 15／個性キリッと快適タウン 17／国際貢献、自治体走る 20／ごみ退治、宿題ずっしり 22／若者流出、村でも都心でも 25／舞鶴復活「ウチが環日本海の玄関」 27／京都、奈良、神戸：「街全体がバビリオン」 30／「産業新地図」まず下絵 32

2章 経営新時代を切り開く

- 週休三日、年一千時間労働 38／わが社は価格創造者 41／情報発信でファンづくり 44／国際化担う「連邦企業」 47／「ベンチャー王国・関西」へ 50／クリーンは企業の勲章 52／「新消費者＝外国人」にターゲット 55／異業種R&Dグループ快走 58／下請けが大手を従える日 60／地場産地おしやれに衣替え 64／生き残りへ「この指とまれ」 66／職人の技、ハイテクが継ぐ 68／ファッション都市、光輝く 70／京の匠は先端志向 72／「小は美德」こそ活力の源泉 75／「世界にないもの」で創業の夢再び 77

3章 商都・商魂、変革に挑むマーケット

コメ商人、アジアに種まき 82／真価売る南船場ジュエリー街 85／アフリカ発関西
空港着、花の航空便 87／端末ボン！ 生鮮流通速く安く 89／“鉄腕”建材デイス
カウンター 92／世界に「京染めスーツ」売り込む 94／リサイクルの風、弾む素材
産業 96／北浜、新二部に生き残りかける 98／システム化で“先行の利”ねらう
100／国別ファンド、成育に期待 103

4章 情報商都への道

“カンサイ発”地球サイズに発信 108／特派員がやってきた 112／出版・TV“東高
西低”われらが打破 114／VRが開く夢のコミュニケーション 117／ソフト分野で
“アイデア起業”続々 119／若手デザイナーの登竜門 121／国際会議いらっしやい
123／大道芸人、路地裏にネット 126

5章 揺らぐ衣・食・住・遊

お屋敷町・芦屋に相続税ズシリ 130／おふくろは薄口だった 133／どっ派手ファッ
ション意地やねん 136／心に浸み入る“きれいな関西弁” 139／千里第一世代、ふるさ
と再生の試み 142／キタ新地・今昔遊び人気質 145／“らしくない街”江坂の住人た
ち 148／ニュービジネスならおまかせ！ 151／“文化首都”支える草の根パワー 153

6章 生活者が変える消費市場

- “価格ウォーズ”に聖域なし 158／半径10キロ、ワイドな“商店街” 161／都心の売り物は「ハッピーな時間」 164／言うたことを聞いてくれる店 167／アフターセブンの買い物も楽々 170／外国人問屋マン、流通に風穴 172／環境・福祉、問われる実践 175

7章 文化は明日のプログラマー

- 「我らの手で」企業メセナ、地道な輪 180／手づくり交流奮闘中、アマ親善大使 183／伝統芸能もリニユアル 186／民博がひっぱる“複眼アカデミズム” 189／浪速オペラ「世界が舞台や」 192

8章 スポーツ首都への条件

- 大学スポーツ復興へ試練 196／ガンバ大阪、全国区人気へシユート 200／猛牛・青波、タイガースに負けへん 203／ここは“飛雄馬養成塾” 205／メーカー火花、夢は「大阪五輪」の陣 208

9章 転機に立つ大学

受験者減、「関関同立」にも危機感 ²¹⁴／京大人文研、栄光の道再び… ²¹⁷／教授が
地場企業を「営業回り」 ²¹⁹／キャンパス、進む「京都脱出」 ²²¹／社会人パワ
ー「門戸開放」迫る ²²³／アジアの留学生「好きやねん、関西」 ²²⁵／生命科学「ノー
ベル賞級」ズラリ ²²⁸／「院」変身、夜間MBAコースも ²³⁰／「算盤」したたか私
大経営 ²³²／「個性派ほしい」——東京の企業ラブコール ²³⁵

10章 未来社会シミュレーション

百兆円経済圏へ離陸 ²⁴⁰／ハイテクけん引役に製造業復権を ²⁴³／貨物量七・二倍、
関西空港が担う「第二の開国」 ²⁴⁵／民間主導で巨大R&Dゾーンに ²⁴⁷／新動脈で
「70キロ通勤圏」誕生 ²⁵⁰／気がかりは全国以下の人口増加率 ²⁵²

1章 巨大プロジェクトを超えて

二十一世紀まで七年余り。二〇〇一年には関西国際空港、関西文化学術研究都市、明石海峡大橋など現在、関西で進行中の総額四十兆円にのぼる建設プロジェクトの多くが完成しているはずだ。経済、産業、街、人々のライフスタイルはどう変わるのか。巨大プロジェクトを次々と追い求める時代から、それを活用して社会に根づかせるソフトの時代へ。第一章は、都市、地域を舞台にした変容の芽を各地に追った。

京滋奈、弾む知的都市圏

JR近江八幡駅から車で湖東の蒲生町に向かう。二十分ほどで近江鉄道桜川駅。こがね色に染まった一面の稻田の向こうに台地のような丘陵が見えた。びわこ空港の建設予定地だ。

あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る 額田王

紫草むらさきのにはへる妹を憎くあらば人妻ゆえにわれ恋ひめやも 大海人皇子（天武天皇）

有名な万葉相聞歌の舞台になった蒲生野は、空港建設が予定されるちょうど今の蒲生町周辺だ。相聞歌は六六八年五月五日、大津宮から天智天皇ら近江朝廷一行が蒲生野に遊獵した時に詠まれた。滋賀は古来、交通の要衝。蒲生野は当時、東国などへの畿内の玄関口の役割を果たしていたという。

1章 巨大プロジェクトを超えて



世界の文化・頭脳拠点をめざして（企業の研究所などの建設が進む関西文化学術都市精華・西木津地区）

びわこ空港の開港目標は二〇〇〇年。九一年十一月、国の第六次空港整備五カ年計画で正式に認知され、実現に向け動き出した。

データーへびわこ空港概要

建設予定地 滋賀県蒲生、日野両町の百八十ヘクタール。当初は二千メートル滑走路一本

乗り入れ路線 札幌、福岡など主要都市

名神高速と計画中の第二名神高速が同空港の陸の「足」になり、学研都市を含め京都、奈良など東近畿の内陸主要都市はすべて一時間圏内に入る。稲葉稔・滋賀県知事は「京都、奈良、大津、そして学研などの内陸各都市が一体になって発展する京滋奈都市圏の時代が来た。空陸一体の整備を進め、関西の新しい東の玄関口として活用してもらい、文化都市連合の引き金にしたい」と戦略の構図を語る。

学研都市の北の玄関口、京都・田辺町。近鉄新田辺駅周辺には地銀、信金など金融機関の支店がひしめき、学研の町の熱気が伝わってくる。この

京滋奈3府県は文化の宝庫

(文部省調べ)

文 化 財	件 数	近畿2府4県 に占める比率 (%)	全国に占める 比 (%)
国 宝	497	81.1	47.9
重 要 文 化 財	4,195	73.6	35.7
特別史跡・名勝・ 天然記念物	27	87.0	17.1

駅前の一等地に大手スーパー、平和堂の出店計画が持ち上がった。学研地域での大型店第一号となる。

「二十一世紀都市となる学研地域への熱い思いは、周辺都市の関係者に共通している。とりわけ平和堂の進出は京滋奈時代を先取りする動き」と広野寛・滋賀銀行会長は地元資本の素早い対応を評価する。

新田辺駅から車で南へ十分、学研都市の中心、精華・西木津地区だ。

あちこちで山肌がえぐられ、ざん新なデザインの研究施設群が山あいに見えてくる。

データⅡ 学研都市の概要

面積 京阪奈丘陵の一万五千ヘクタール

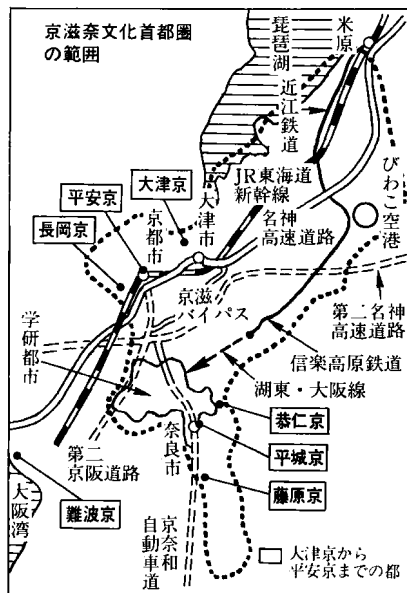
人口 完成時は三十八万人

事業費 四兆円 波及効果は十兆円

地球環境産業技術研究所など拠点九施設が建設中（完成済みは二十施設）だが、全体計画を登山にたとえると二合目に入ったところ。

宇野収・学研都市推進機構会長（関経連会長）は、「文化施設はこれからが本番。総合芸術センターや文化財総合機構、国立国会図書館関西館建設構想などが具体化すれば、筑波研究学園都市とは性格が違った文化拠点としての学研のイメージがもっと明確に見えてくるはず」と明言す

1章 巨大プロジェクトを超えて



る。

ここに一つのリポートがある。京都、滋賀、奈良の三経済同友会が来るべき内陸都市連合の時代に備えて提唱した「京滋奈文化圏構想」報告書だ。東西に走る国土、経済軸に対し、若狭から滋賀、京都、奈良を経て紀伊半島に至る南北のルートは日本のいわば歴史、文化軸。取りまとめ役の一人、河野卓男・ムーンバット会長は「二つの軸がほぼ交わるところがちょうど学研都市の周辺。二十一世紀は生産中心の社会から、文化や知恵の創造、活用で人が集まり、都市インフラ整備が進む時代になる。そう予測して文化軸中心の都市圏づくりを提唱した」と振り返る。

京滋奈地域の歴史、文化ストックの厚さは言うまでもないが、経済力の弱さは否めない。

データⅢ へ福井県を含む近畿二府五県のプロジェクト概要、九二年一月現在、関西産業活性化センター調べ

全体の計画（事業費判明分） 六百二十二件、三十九兆七千億円
京滋奈三府県分 百九十九件、四

兆九千億円

京滋奈地域の近畿全体のプロジェクトに占める事業費シェアは一二％。関西問題に詳しい下河辺淳・前総合研究開発機構理事長は「経済の量的拡大を求める時代は終わった。関西国際空港と一体となった大阪ベイエリアの開発で大阪への一極集中が加速される結果がみえているだけに、学術や文化を重視した京滋奈地域の都市づくりは貴重」とみる。「京滋奈はベイエリア圏に対抗するのではなく、連携、補完し合う関係が一番望ましい。内陸都市抜きに大阪の国際化、世界都市化もまた語れない」。塚本幸一・京都商工会議所会頭はずばりこう指摘する。

これまで関西は経済集積の厚い京阪神のトライアングルを軸に動いてきた。京滋奈都市圏がどういう発展の軌跡を描くか、内陸都市連合の挑戦は「文化大国」をめざす日本の指標になる。

ハイテク施設に「頭脳」結集

茨城県つくば市に在住する理化学研究所の研究者、熊谷教孝さんが、兵庫県西部で建設中の播磨科学公園都市の周辺で住居を探している。家族は妻と小学生の子供が二人。「新都市の近くにある佐用町は星の都といわれるほど星空がきれい、と聞いた。天体望遠鏡を買おうかな」と、楽しみにしている。

上郡町など三町にまたがる科学公園都市では世界最大の大形放射光（SR）施設「Spring-8」の建設が進む。熊谷さんに転居を決意させたのは、九八年に稼働するこのSR施設の存

在。放射光に含まれる強力なエックス線を使って医療診断や物質の構造解析ができ、先端技術開発に欠かせない。

欧州連合が仏・グルノーブルに、米がイリノイ州のアルゴンヌに建設中だが、播磨のものが最大で、世界の科学者の注目を集めている。高エネルギー物理学を研究している熊谷さんにとっても大きな魅力だ。

実は関東から関西への研究者の移転はすでに始まっている。九一年に、関西文化学術研究都市の自由電子レーザー研究所長に就任した富増多喜夫さんはつくば市の電子技術総合研究所量子放射部長から転身した。兵庫県に生まれ、五六年に京大理学部を卒業。「関西には国立の研究機関がなかったの」で、関東で就職したが、地元の要請を受けて三十五年ぶりに関西に戻ってきた。「SRと自由電子レーザーで関西は光子技術の一大研究拠点になる。十年間は関西で頑張りたい」と、目を輝かせる。

九〇年の国勢調査（速報）によると、全国の科学研究者は、九万四千二百人。このうち関東には五四・四％、これに対して関西は一八・九％の一万七千八百人で、関東の三分の一程度。十年前の四分の一に比べれば改善はしているものの、日本の「頭脳」は極端に関東に集中しているのが現状だ。

しかし、関西にはSR施設をはじめ、関西学研都市のイオン工学センター、自由電子レーザー研究所など、光子とバイオテクノロジー（生命工学）の分野を中心に、世界でも最先端の研究施設

設がそろいつつある。

二十一世紀の初頭には、関西学研都市だけでも、研究従事者とその家族は約六万人に達する見通し。西播磨地域では九五年の科学研究者数は約千八十人、技術者数は約一万六千六百人に上る見込みだ。関西の「頭脳」は確実に厚みを増す。

「日本では外国人はあまり採用しないのか」——。SR施設を運営する財団法人高輝度光科学研究センターの事務所（神戸・ポートアイランド）には、海外からもうこうした売り込みや問い合わせが後を絶たない。播磨の同施設に張りつく研究者は、周辺企業の社員や短期滞在者を含めて、ざっと五百人。同センターの林田敏明理事は「このうち半分くらいは外国人になるかもしれない」とみている。

熊谷信昭・前大阪大学学長は「阪大、京大、神戸大には、バイオテクノロジーの分野で今すぐノーベル賞をとってもおかしくない人がゴロゴロいる。優秀な子供に良い教育施設を与えれば成績が上がるのと同じで、播磨のSRが完成すればノーベル賞は現実のものになるだろう」と見通す。

SRができる播磨地域では全国、そして海外からもやってくる研究者のため住環境の整備など受け入れ準備に入っている。三日月町は、町営住宅三十戸のほか「国際的な学者の、憩いの場になるように」（岡田守町長）と、温泉を核にした保養施設も構想中だ。「これで過疎化に歯止めがかかる」と期待する地元自治体も多い。